

この18ヶ月間、テゼ共同体は信仰の冒険を続けてきました。私たちは、「Together（共に歩む）」¹と名付けられた「神の民の集い」を、キリスト教の多くの諸教会の運動、共同体、組織と手を組んで準備しました。「シノダリティ（ともに歩む教会）」をテーマとしたカトリック教会のシノドスの開催にあたってブラザー・アロイス²が表明した直観をとおして、私たちは「共に歩む：神の民の集い」の準備のために他者に深く耳を傾け、さまざまな教会グループや一般の善意の人々の賜物を探し求めました。

ローマのサン・ピエトロ広場で開催されたこのエキュメニカルな祈りの集いには、教皇フランシスコによって招かれた諸教会の指導者20人以上と、シノドス（世界代表司教会議）第16回通常総会に参加するすべての人たち、そして週末のプログラムに参加し、ローマの諸教会に迎え入れられた4千人の若者を含む、世界中からのあらゆる年代の1万8千人が集まりました。同時に、世界中の222の会場で、多くの人々がこの集いに連帯して祈りました。

この経験を私たちはどのように理解すべきでしょうか。キリスト者たちが共に旅する未来をどのように切り開くのでしょうか。「あなたがたの師は一人だけで、あとはみな兄弟姉妹である」（マタイ23：8）とイエスは言われました。すべてのキリスト者は兄弟姉妹であり、まだ不完全であっても現実の^{コミュニオン}交わりの中で結ばれているのではないのでしょうか。キリストは私たちを呼び寄せ、私たちが社会の片隅に生きる人々と共に、同じ旅人としてキリストと共に前進する道を開いてくださるのではないのでしょうか。この旅路の中で、そして和解のための対話の中で、私たちは、互いを必要としていることを思い出したいのです。それは自分の意見を押し付けるためではありません。人類家族の平和への貢献として互いが必要なのです。³

このような^{コミュニオン}交わりの豊かさへの感謝のうちに、地球の叫びや人類家族を分断する分極といった今日の課題に立ち向かうために必要な力を見出すのです。出会いと互いに耳を傾けることをとおして、私たちは神の民として共に旅を進めましょう。

他者に耳を傾けることを再発見するとはどういうことでしょうか。そこで表現されるかもしれない不安や恐怖を、遠のけようせずに、理解する準備はできているのでしょうか。

ローマからテゼに向かう途中、私はスロベニアの首都リュブリャナに立ち寄りました。リュブリャナはテゼの第46回ヨーロッパ青年大会⁴⁽⁴⁾の開催地であり、国際準備チームのボランティアの青年たち、テゼのブラザーたち、聖アンデレ修女会のシスターたち、スロベニアの友人たちにそこで会いました。「共に旅する」というテーマで以下に記すことの多くは、そのときの私たちの会話の実りです。

テゼのブラザーたち、この「手紙」の準備に協力してくれた方々、そしてこの旅をこれから分かち合ってくれるすべての人に感謝します。

皆さんすべての幸せを祈りながら。

Brother Matthew

¹ この集いは2023年9月30日に開催されました。詳細はtogether2023.net

² ブラザー・アロイス：ブラザー・ロジェが亡くなった2005年8月16日から2023年12月2日まで、テゼ共同体の院長を務めました。テゼ共同体における^{コミュニオン}交わりの奉仕者としてのこの18年間、彼は絶え間なくエキュメニカルな関係を希求し、困窮している人々との連帯の道を常に求めました。

³ ウクライナ、パレスチナ、イスラエルをはじめ、アフガニスタン、ミャンマー、パキスタン、ハイチ、ニカラグア、スーダンなど、今日の世界の多くの場所で起きている紛争がもたらす苦しみを目の当たりにしている私たちに、神は何を告げているのでしょうか。

⁴ 2023年12月28日から2024年1月1日まで開催。

リュブリャナで、ある人がこう話すのを聞きました。「今日、社会におけるホームレスの問題は、単に物質的な住まいのことだけではない。多くの人にとって、それは内面的な現実なのだ。しかし、内面的な安全を求めるあまり、思考回路が孤立してしまうこともある。」またある人はこんな問いを發しました。「一緒に旅をするとして、出發するためにどれだけの合意が必要なのだろう。口先だけのきれいな言葉が、本当は相手のことを忍耐しているという事実を隠してしまうことがある。対話に自らを開くとき、私たちはリスクを冒すことになる。」これらの問いは私たちをどこへ導くのでしょうか。

■耳を傾ける

すべての対話の中心にあるのは、耳を傾けることです。モーセは神の民に告げました。「シエマ・イスラエル：聞け、わが民よ」（申命記6:4）と。そしてこの言葉は彼らの日々の祈りの名前となりました。数世紀後、ヌルシアの聖ベネディクト⁵の規則は、「注意深く耳を傾けなさい」と始まっています。

耳を傾けることは愛の行為です。耳を傾けること、それはすべての信頼関係の中心です。聴くことなしには、成長も発展もありません。聴くことなしには、どんな関係も機能しません。無欲に相手の話に耳を傾けると、それは相手に存在の場所を与えます。そのとき、私たちは相手に表現の機会を提供します。その人が表現すべきこと、時には言葉では言い表せないことを表現できる空間です。

そして、聴くことの中心にあるのは沈黙です⁶。聖書は多くの箇所ですべてのそれを伝えています。エリヤは、地震や風や火の中ではなく、静寂のそよ風の中で神に出会いました（列王記上19:11-13）。マルタの妹マリアは、イエスの足もとに座り、イエスの話に耳を傾けました（ルカ10:39）⁷。聖書の古い祈りはこう記しています。「あなたは私の耳を開いてくださいました」（詩編40:7）。

今日、私たちはしばしば、一番大きな声を發した者が成功するのように感じます。暴力はますます多くの場所で増加し、私たちはもはやどこへ向かえばいいのかわからなくなっています。しかし、神は決して暴力の創造者ではありません⁸。神は決して押し付けません。「私たちは神が宣言なさるのを聞きます。主は平和を宣言されます」（詩篇85:8）。

相手の話に耳を傾け、理解しようとするところこそ、前へ進む道ではないでしょうか。「耳を傾ける心」（列王記上3:9）は、従順を装っておとなしくなったり、不正義に直面して声を上げるのを止めたりするどころか、私たちの内なる確信の深みに立ち、勇気ある創造的な決断を可能にします。

■旅

人生を旅するとき、私たちは観光客なののでしょうか、それとも巡礼者なののでしょうか。ただ外から眺めるために旅をしているのか、それとも心の奥底にある渇きが私を前に向かわせているのでしょうか。巡礼者は、たとえ終着点が見えなくても、旅の一步一步に意味を求め、直観的に方向性を感じ取ります。しかし、目標のない道は、目的のない放浪になりかねません⁹。

そんなとき、私たちはイエスの言葉を思い出すのです。「わたしは道であり、真理であり、命である」（ヨハネ14:6）。イエスとともに旅をするということは、この道と真理と命にともにつながるといえることです。イエスは私がたどる道であり、私はイエスの言うことに信頼し、そしてイエスは私たちを想像もしなかった命の充満へと導いてくださいます。

イエスはその旅から誰も排除しませんでした。神との交わりコミュニオンに根ざしたイエスは、自分のもとを訪れる者、正しい者、正しくない者を問わず、誰とでも人生を分かち合いました。社会の片隅にいる人々、罪人や追放された人々、さらには自

⁵ ヌルシアの聖ベネディクト（480-547年頃）：西方修道会の父。彼が書いた規則は、修道院の発展とともに欧州全土で採用され、後の多くの修道規則に影響を与えました。

⁶ 「共に歩む-神の民の集い-」の中で、教皇フランシスコは沈黙について次のように語りました。「今晚、私たちキリスト者はサン・ダミアノの十字架の前で、師の玉座である十字架の前で耳を傾ける弟子たちとして、沈黙のときを捧げました。この沈黙は空虚なものではなく、信仰と期待と覚悟に満ちたときでした。騒音に満ちた世界では、私たちは沈黙はしばしば慣れています。そして沈黙はしばしば葛藤をもたらします。なぜなら、沈黙は私たちに神と自分自身と向き合うことを強いるからです。しかし、沈黙はみことばと生活の基盤です。-沈黙は、教会共同体の中で友愛の伝達を可能にします。」

⁷ 多くの文化において、誰かの足元に座ったり、その人の足に触れたりすることは、その人を敬う作法です。イエスの足元に座ることは、私たちにどのような意味を持つのでしょうか。

⁸ イエスの十字架上の死は、神が苦しむ人々とともにおられ、決して苦しみをもたらす側におられないことを示しています。イエスは友人ラザロの死に涙されました。そしてイエスの復活は、死と苦しみが決して最後でないことを示しています。

⁹ 人生には、さまざまな理由で目的地が見えない時期があります。あえてそのような時期を受け入れなければならない日々もあるのです。

¹⁰ マタイ11:29参照。心が柔和なとき、それは私たちがイエスとともに歩んでいるしるしではないでしょうか。愛の反対は、怒りや憎しみではなく、心の硬さです。

¹¹ 謙虚さは、服従や屈辱とは何の関係もありません。それどころか、それは大きな内なる強さを必要とし、決してその人の賜物や資質を押し潰しません。

¹² 「物語を知る唯一の方法は、その人たちを知ることであり、そうすればその人たちが物語を話してくれるかもしれません。——物語、そして特にお祈りは、私たちの記憶を助けます。だから私はアドニヤマトンハ語で物語を語り、歌うのです。なぜならそれは、自分が神に似せて造られたこと、創造主である神が万物を造られたことを思い出す助けになるからです。そして、確かに私はそれを思い出すのです。」（アドニヤマトンハ族の長老・南オーストラリアの合同教会牧師であるデニス・チャップマン女史の言葉『Yarta Wandatha』より）
©2014 Denise Chapman.

分の同胞でない人々の中にも神の存在を認めました。イエスは自分の持っているものを与え、また出会った人々から受け取りました。イエスの人生は彼らによって試され、そしてしばしば彼らによって豊かにされたのです。

柔和で謙遜なイエス¹⁰は、私たちがこの同じ道に招いておられます。私たちは、この旅路で他者から与えられるものを歓迎する謙虚さと寛大さ¹¹を求める準備ができていますでしょうか。

¹³ アンロール・ダネ牧師はこう記しています。「分裂は多様性と同じではありません。問題となっているのは、教会の多様性ではありません。それは正常であり、必要でさえあります。そこには、文化的、歴史的、社会的、民族的、性的など、それぞれのアイデンティティが含まれるからです。これらのアイデンティティが、キリストにおいて「もはやユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、男も女もない」(ガラ3.28)という理由で二の次とみなす人がいても、それらは確かに存在するのであり、信者の存在が具現化されるのはその中においてです。二次的な存在であり続けることから、ある種の通気性を許容することによって、それらは富となります。---その富は、様々なアイデンティティを平滑化するとするか、それらを分離させることなく、強め、洗練させます。そして互いの中にある聖霊の賜物と働きを認識させます。こうして、アイデンティティの共有を築くことが可能になります。これは、多様性における一致(あらゆる形態の統一性を否定する)から和解された多様性における一致へと移行するエキューメンカル運動のさらなる一歩です。」(「La diversité en Église, de la division à l'enrichissement mutuel」より)

¹⁴ 「互いに共感を示し、謙遜によって互いを癒そう。」(告白者聖マクシムス)

¹⁵ 「共に歩む-神の民の集い-」では、古くから公会議の始まりに用いられた「Adsumus Sancte Spiritus (私たちは、いま聖霊の御前に立ちます)」という祈りがささげられ、聖霊に呼びかけ、聖霊に道を示してくださいました。<https://tinyurl.com/Adsumus>

¹⁶ 「『神の支配』は理想のビジョンではなく、『現実』に根ざしています。... この世の現実に根ざしていないビジョンは幻想です。幻想は、人生の問題を直視できない、あるいは直視しようとしないうちによって生み出されます。それは、現実の世界から非現実の領域への逃避です。」(宋泉盛: チョアン・セン・ソン、台湾の神学者)

¹⁷ 14世紀イギリスの神秘家、ノリッジの聖ジュリアンは、その『黙示録』の中で次のように書いています。「神は、高貴なものや最も偉大なものに心を配るだけでなく、小さなものや幼いもの、低いものや単純なものにも、他のものと同じように心を配られることを、私たちに知ってほしいと願っておられます。これが、彼が『あらゆる物事はうまくいく』とおっしゃったときの意味です。なぜなら、神は私たちに、『どんな小さな存在も忘れられることはない』と伝えたいからです。」

¹⁸ 「神の現実を隣人の現実の観点から見るができなければ、神の臨在に対する私たちの感覚はゆがめられる。そして、隣人の現実に対する私たちの感覚は、神の現実という観点から見なければ、損なわれる。」(小山晃佑: 日本の神学者、『水牛神学』より)

共に旅することは、教会と社会に豊かさをもたらします。しかし一方で、一人ひとりには自分の創造性や発想を表現する空間も必要です。しかし、これらの創造性や発想は分かち合うために与えられているのであり、教会において、人間家族において、共に生を築き上げるために与えられているのです。ギターの弦は横に並んでいますが、美しい音を奏するのは一緒に弾かれたときなのです。

■他者と共にいる

他者と一緒にいることは必ずしも容易ではありません。私たちはそれぞれ傷を抱えています。互いに傷つけ合うこともあります。

人と共にいるということは、話に耳を傾けるということです。相手に時間と空間を差し出すことで、その人は私たちに物語を語りことができます¹²。耳を傾けるということは、違いを受け入れるということです。同意できないかもしれないし、自分には別の世界観があるかもしれません。しかし驚くべきことに、耳を傾け、相手が物語を語ることにゆだねるとき、多くの場合、私たちは共通の人間性を発見します。違いは想像していたほど大きくないのです。多様性の中の一致は確かに可能です¹³。そして、イエスに従うことにあこがれる私たちは、神の内に、そしてキリストの内に、私たちの理解をはるかに超えた一致がすでに存在していることに気づき驚くのです。(ヨハネ17: 21-23)

しかし、人がいかに自分が傷ついているのか、あるいは私たちがどのようにその人を傷つけているのかを語ってくれたとき、私たちはその言葉を心に刻む勇気があるでしょうか。私たちは簡単に自己防衛の仕組みに陥ってしまいます。そして、耳を傾けることをやめ、自分と自分の視点を守ろうとします。心からの共感とは、相手の苦しみを真剣に受け止める覚悟を持つことではないでしょうか。たとえその苦しみをなくすことができなくても¹⁴。

ときには、ひざまずくことを受け入れねばなりません。そのようなとき、聖霊に自分を委ね、聖霊に私が知らねばならないことを教えていただくのです¹⁵。それは、自分の理想を押し付けるのではなく、相手が目の前に持ってきたものを歓迎する謙虚さを持つことを意味します¹⁶。

そして、私たちは決して希望を捨てません¹⁷。使徒パウロは、イエスを裏切った後、復活したイエスの無限の愛に圧倒され、私たちに注がれた聖霊を通して、神の愛が私たちの心に注がれていることを保証しています(ローマ5:5)。私たちは、たとえそれを感じなくても、この静かな存在に頼ることができます。そのとき、私たちの中に信頼が再び生じます。この信頼は、たとえそれが弱く思えても、私たちが神とともに、そして私たちに託された人々とともに、次の一歩を踏み出すのに必要な十分な光を与えてくれるのです。

■神にとどまり、他者にとどまる

旅には時間がかかります。同じように、人間関係を育むために耳を傾けようとすると時間がかかります。ここでこそ、私たちは忍耐強く踏みとどまり、忠実であり続けるのです。

他者との旅、神との旅。この二つは切り離せません。私たちにはこの両方が必要です¹⁸。

ぶどうの木とその枝、その関係を生きるのです。イエスが私の内にとどまっておられるように、私もイエスの内にとどまるようにイエスは招いておられます（ヨハネ15章参照）。「とどまる」とは、時間的な継続を意味します。私たちに求められているのは、一時の約束ではなく、生涯にわたってイエスの内にとどまることなのです。とどまることによるのみ、私たちは成長し、実を結びます。

この実りとは何でしょうか。「私があなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。愛する者のために命を捧げること、これより大きな愛はない」。この道を歩むことは、イエスに従うためにすべてを捧げるリスクを負うことを意味します。福音の愛とは、単なる愛情ではなく、他者へ自己を差し出すことです。これは、私たちがキリストの僕からキリストの友になってゆく人生の旅路なのです。

実りはいきいきと生きる日々によってもたらされます。枝がぶどうの木から命を受けると、私たちがキリストのうちにとどまり、キリストの命によって生きるとき、それは自然に育ちます。福音が差し出すこの冒険を私たちが両手で抱くとき、そこにはあふれるほどの喜びが生じます。この招きに応えますか。

■現代世界の中を共に旅する

今日の課題や私たち自身の弱さに直面し、先に述べたように、行き場を失い、さ迷う自分を感じる人もいます。私たちは、神の傷ついた創造物を目の当たりにしています。傷ついた人間家族もその一部です。搾取され、辱められた人々には、何世代にもわたって苦しみが受け継がれています。紛争や戦争によって引き裂かれた無数の家族がいます。私たちはまた、教会やテゼ共同体においても、キリストの名の下で働く人々によって傷つけられた人々がいることを心にとめていきます¹⁹。

しかし、このような課題に共に立ち向かおうという呼び声が聞こえますか。アフリカのことわざにこうあります。「長い旅を短く感じさせるのは、共に歩むときである」。セレンゲティとマサイ・マラを歩き来する野生動物の大移動では、子どもたちが大人の力に頼って川を渡り、土手をよじ登ります。私たちにも、背負ってもらわねばならないときがあります。ときには、背負ってもらうことを受け入れる勇気も学ばねばなりません。

そして、そのような試練に共に立ち向かうとき、私たちはそこで美や超越を体験するかもしれません。その体験は、新たな力で再び歩き出す活力を生み出します²⁰。

イエスの復活の日、イエスの友人の二人は、イエスが殺されたエルサレムに背を向けて歩いていました。（ルカ24:13-35）。しかし、彼らが歩いていると、見知らぬ人がそれに加わりました。しばらくして、その人が彼らと食卓を囲んだとき、彼らは自分たちが出会っているのはイエスだと理解しました。見知らぬ人が、私たちがキリストの存在を識別し、キリストがいつも私たちとともにいてくださることをもう一度理解させてくれることがあります。

「恐れてはならない」とイエスが私たちの心にささやきます。「わたしは、世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ28:20）。この約束に耳を傾けるのです。

資力に乏しく、そしておそらく自分の小ささを感じながらも、小麦粉に混ぜられたパン種のように（マタイ13:33）、一人ではなく、他の人々と共に、互いに豊かになりながら、もう一度共に旅立つ勇気を持つのです。

¹⁹ 私たちは、傷つけられた人々の声に耳を傾け、その苦しみを認め、すべての人にとって安全な環境を確保するために全力を尽くします。
taize.fr/ja_article26170.htmlの「Ascertaining the Truth: 真実を知る」を参照。

²⁰ ヒッポの聖アウグスティヌス：「私はあなたを愛してきた、古くて新しい美しさを。私はあなたを愛してきた。あなたは内におられたのに、私は外の世界にあなたを求めた。美しくなかった私は、あなたが創造されたものの中に身を投じた。あなたは私と共にいて、私はあなたと共にいなかった。--- あなたは私に触れ、私はあなたの平和を得ようと燃え上がった。」（『告白録』より）

テゼでのボランティアについて:テゼで開催される集いはすべて、18歳から29歳までの若い男女のボランティアの働きによって成り立っています。ボランティアは数週間から、最長一年という長期にわたってテゼに滞在します。私たちテゼのブラザーは、この青年たちとテゼ共同体の生活において最も大切なことを分かち合います。

-共に祈る:テゼで行われるすべてのことは、一日三回の共同の祈りなしにはありえません。また、ボランティアは共同の祈りを手伝えることによって、訪問者すべてを迎え入れるブラザーたちの働きを助けます。

-共に共同体の中で生きる:ボランティアは、さまざまな大陸、異なる教会から集まった若者たちと共に、多様性の豊かさを分かち合いながら、小さな一時的な共同体を築きます。

-共に他の人々に奉仕する:テゼで訪問者を歓迎するために協力したい方、さらに詳しく知りたい方は以下のサイトをご覧ください。
www.taize.fr/volunteering

共に旅を続ける:2024年

2024年には以下の集いが予定されています。

- 年間を通して：18～35歳の青年を対象とした国際的集い（その他の年齢については、テゼのウェブサイト参照）
- 2024/3/24～4/7：聖週間と復活祭
- 2024/7/7～12：若いイスラム教徒とキリスト者の友好の集い
- 2024/8/4～11：正教会の信仰の分かち合いと証し
- 2024/8/25～9/1：18～35歳の青年対象の黙想の集い
- 2024/12/28～2025/1/1：第47回ヨーロッパ青年大会（開催地は2024年の年末に開催されるリュブリャナ大会で発表されます）

www.taize.fr/dates